

## 1. はじめに

予定よりも遅れましたが、D区西側の下面調査が6月25日に終了しました。D区西側では、20基以上の埋設土器や建物の柱穴など大量の遺構が発見され、至る所で地震災害の痕跡が見られました（第1図）。

梅雨の時期に入り、コンディションの悪い中での調査が続いていますが、調査もいよいよ佳境に入ってきました（第2図）。



第1図 D区西側下面 完掘



第2図 発掘調査のようす

## 2. 発掘調査の状況

たより6月号第5図でお示したように、下面は3つの特徴的な「場」に分かれています。今回は、住居の炉跡や配石遺構の具体的なすがたが見えてきた、C区の「②マツリ・生活の場」について詳しくご紹介します。

第3図は、こぶし大の礫を円形に並べた炉跡です。不思議なことに、炉の中には火を焚いた痕跡が見られず、炉に隣接して土器が埋設される焼土が見つっています（第4図）。住居の炉跡と思われる遺構は、現在3か所見つかっています。



第3図 円形に並べられた炉石



第4図 土器が埋設された焼土

配石遺構には、つぎの3種類が見られます。(a) 砂利・小礫(径1~5cm)がまとまるもの(第5図)、(b) こぶし大の礫(径5~10cm)がまとまるもの、(c) 砂利・小礫と大型石(径30~50cm)が組み合わさるもの、です。

C区西側~D区には、(b)・(c)の大型配石遺構があります。C234は直径2.5mの範囲にこぶし大の礫が円形にまとまります(第6図)。D193は、直径6mの範囲に砂利が広がります(第6図)。この砂利を取り除くと、下から規則的にタテ・ヨコに組まれた大型の石のまとまりが現れました(第8図)。集められた礫・石の種類は川原石や軽石など様々ですが、緑色や黄色などとてもカラフルなものが選ばれています。

配石遺構には、火を焚いた跡・埋設土器などが伴います。この時期、北日本を中心に石を用いた遺構がさかんに作られます。代表的なものに「環状列石（かんじょうれっせき）：ストーンサークル」があります。ストーンサークルは、お墓やマツリ・祈りの場としての用途・機能が想定されています。土橋遺跡の配石遺構も円形を指向し、規則的な石の配置や多彩な色が用いられることなど、土橋ムラに暮らす縄文人たちにとって、とても大切なマツリ・祈りの場であったことが想像されます。



第5図 (a) 砂利・小礫がまとまる配石遺構 (C152)



第6図 (b) こぶし大の礫がまとまる配石遺構 (C234)



第7図 (c) 砂利・小礫と大型石が組み合わさる配石遺構 (D193)



大小の石の組み合わせ



第8図 タテ・ヨコに組まれた大型の石

### 発掘調査成果についてのお知らせ

土橋遺跡では、昨年度と同様に現地での一般公開を開催する予定でした。しかし、コロナウィルス感染拡大に伴う昨今の情勢から、一般公開の実施は難しい状況です。その代替として、現在、遺跡調査で得られた成果について動画を製作中です。8月中の公開を予定しております。ご期待ください。